

保育室の環境構成が幼児の活動に与える影響 —気になる子のカンファレンスより—

佐藤 智恵¹ 七木田 敦²

The influence of the environmental configuration of nursery room on young child's activity
—From the conference to difficult child—

Chie Sato¹, Atsushi Nanakida²

The purpose of this research is to go over the factors from the environmental configuration of the nursery room and to bring out the importance of the environmental configuration in practicing nursing of the difficult child.

The target is a child who is enrolled in a kindergarten. We investigated the environmental factors of the nursing by observation record of the child and the conference record conducted with kindergarten teachers. It was found from the conference that the children around the entrance of the nursery room when they came to the kindergarten in the morning made the child hard to do the routine work. After the teachers changed the environmental configuration of the nursery room so that children do not need to gather in one place, it became easy for the child to do the routine work. Though the people who care children seem to have the tendency to think that they need to change the relationship of themselves when considering the child caring, this research showed that the change of environmental configuration could be change the condition of a child.

Key Words : nursery room environmental configuration difficult child

1. 目的

保育所・幼稚園で過ごす幼児にとって、保育者の人的関わりが重要な役割をもつことは言うまでもない。特に、保育実践において気になる子と言われる幼児に対する保育者の関わりについての研究は多くなされており、保育者の関わりによって、幼児の姿が変容することも多数報告されている（刑部1998、本郷ら2003、吉田2004）。

保育者の関わりという人的環境から検討されることの多い気になる子への保育であるが、現在の保育実践を考える際、人的環境である保育者や保護者の関わりだけに問題を集約させすぎているのではないかということが危惧される。幼稚園教育要領や保育所保育指針においても

「環境」は5領域の一つとされ、環境を通して保育を行うこと、幼児が文字や数など身の回りの様々な事象に関心を持てるように保育者が遊具や物の準備をすることの重要性が明記されている。と同時に、幼児の自発性が発揮されるような空間の設定も保育者の援助として重要であると考えられている。このように保育実践において「環境」とは、自然事象、身の回りの文字や数、地域社会での事象、人的環境である保育者、物的環境である環境構成などを指し、その領域は多岐に渡る。これまでの保育実践における「環境」に関する研究には、自然に関すること、（例えば吉田ら2008・田尻2002）、夜間保育所の保育環境について（北浦ら2001）などが報告されている。保育実践の中での環境構成については渡辺（2008）が、保育室の環境構成と保育者の葛藤の変容過程についての関連性を明らかにした。その結果、保育者の意図的な環境構成や援助によってコーナー遊びの安定性が得ら

1 広島大学大学院（現 神戸親和女子大学）
2 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設

れたことを報告している。環境構成を変化させることで、幼児が生活しやすくなることは、十分考えられることである。しかし、気になる子への保育を考える際、保育環境や幼児の動線ということに着目した研究はこれまで見当たらない。

そこで本研究では、気になる子への保育実践を考える際に、保育者の関わりからではなく、保育室の環境構成という物的な環境要因から検討を行い、保育実践における環境構成の重要性について明らかにすることを目的とする。

II. 方法

本研究においては、担任保育者から気になる子として挙げられた1名の男児の観察記録、また観察をもとに行われたカンファレンスの記録を用いて、保育室の環境構成についての検討を行う。

1. 対象

対象は、A幼稚園4歳児クラス(35名)を担当する保育者B、保育者Cから「気になる子」として名前が挙げられた男児D(以下、D児と表記する)。

2. D児の様子

D児は、200X年、4歳児クラスより幼稚園に入園した。その年の9月に、入園後半年を経ても、一緒に過ごす友達がおらず、子どもとの関わりというのがほとんどないこと、基本的な生活習慣や身辺整理が習慣化しにくく、注意力が持続せずに行動の途中でやまっていることを見失うことが多いこと、自分で考えて行動することが苦手ということで「気になる子」として担任保育者から名前が挙げられた。

特に気になること以外の当時のD児の実態としては、担任保育者から、慣れた大人に対しては「○○したらどうなるん?」と何度も話しかけたり繰り返して聞いたりして返事を求めることや、自分が納得しないと行動に移さないこと、興味関心があることについては他児の傍らに行き様子を見ていることなどが挙げられた。また保護者は、D児のことを気にかけており、登園時は終始D児のそばについて言葉をかけていることが多いことが報告された。

3. 観察とカンファレンスについて

D児の様子について、筆者ら大学側参加者3名(大学教員1名、大学院生2名)と幼稚園教諭、園長、副園長らが出席するカンファレンス

を実施し、保育について考える時間をもつようにした。これまで200X年10月7日、11月17日、1月14日の3回カンファレンスを開催している。また筆者らはカンファレンスを実施する週とその前後の週、約2週間に1度程度の間隔で幼稚園を訪れ観察を行うようにした。カンファレンスはその観察記録を基に実施している。観察時間は日によって異なり、9時すぎから10時30分まで、10時30分すぎから11時30分まで、11時45分から13時まで、というように、登園から自由あそび、集いの時間、お弁当の時間など保育中におけるD児のさまざまな姿を見られるように配慮した。大学側参加者らは観察後、すぐに記録を書き起し大学側の資料としてまとめ、カンファレンスに持参した。一方、担任保育者も前回カンファレンスからのD児の様子を書き起し、資料を作成した。

カンファレンスでは、D児の遊びの姿や生活の様子、D児への保育者の関わり、他児とD児の関係などについて、筆者らが観察において気になったことや、保育者らが日常の保育実践で困っていることなどについて話し合った。1回のカンファレンスの時間は、おおよそ1時間半程度である。

III. 結果

カンファレンスの議題の中で、環境構成に関する話し合いが行われたのは、11月18日の第2回目のカンファレンスにおいてであった。本稿においては、その背景が明らかとなるように、観察1、2、4、5のそれぞれの記録と第1回目と第3回目のカンファレンスの経緯についても記述を行う。

観察1(9月30日)

・自由あそび

D児は何をするでもなくあちこちフラフラしていることが多かった。大人への関わりを求める姿が見られる。他児への関心はあまりない様子だが、相手が大人だと、自分からルールのある遊びを考えて提案したり、やりとりが続く。しかし、そこへ他児が入ってくるとあそびが続かなくなる。

・つどいの時間

全体の流れからは常に少し遅れて行動している。集団の中で過ごすことは可能であるが、他児と一緒に体を動かしたり、全体の中で発言したりすることは上手く出来ないようであった。

第1回目カンファレンス（10月7日）

担任保育者からは、D児が大人には少しずつ自分の気持ちが出せるようになってきているので、その部分を大切にしたいと考えていることが話された。母親がD児を心配して常に先回りをして言葉をかけていることも話され、子育てに不安を抱える母親に対する助言が必要であることや、また、他児とのかかわりについても、まだどう関わったらいいかがわかっていないと思うことが述べられ、今の段階では保育者が短時間でも一緒に遊ぶ時間をもつなどの関わりが必要であることが参加者全体で確認された。

観察2（11月10日）

・登園時

D児は持ち物の片付けがなかなか行えず、カバンを背負ったままウロウロとテラスを歩き回ったり、カバンを母親のそばに置いてはまたウロウロしたりする。次第に他児らは外に遊びに行き始め、部屋にはD児と登園してきたばかりの幼児2、3名だけになっている。母親は何度もD児の名前を呼んだり、片づけをさせようとするが、D児はフラフラと他所へ行ってしまう。担任保育者B、Cが声をかけるとその時はやろうとしているが、すぐに気が逸れてしまっていて、結局片付けに40分近くかかった（写真1）。

観察3（11月17日）

・登園時

今日は、D児はまだ完全に朝の片づけが済んでいなかったが、登園から10分ほどで母親が帰宅した。D児は出席ノートのシールを貼ろうとするが、シール貼りの場所に先に他児らが3名程おり、その周りにもシール貼りの順番を待つ幼児らが密集しているために、中に入れないでいる姿が確認された。（当時の環境構成を図1に示す。）その後、保育者Cに促されて自分でシールを貼る。次にロッカーにカバンを入れようとするが、カバンが大きすぎてなかなかロッカーに入らない様子であった。



写真1 靴をかけたままウロウロするD児

第2回目カンファレンス（11月18日）

朝のルーチンワークが困難なことに関して、これまで、D児の気が逸れやすいことや母親の関わりなどに注目して話をしていたが、保育室の環境構成にもその要因があるのではないかとということが話題となった。D児の朝のルーチンワークの困難さには、先の2つの理由だけでなく、シールを貼るためのスペースが狭く、入口付近に幼児が密集していることも原因ではないか、という意見が出された。元々、他児の中に入っていくことが得意ではないD児にとって、この環境構成は入りにくい環境となっており、そのために他児がシールを貼り終え他所に行くまで、テラスなどでウロウロしているのかもしれないことが確認された。そこで、可能な範囲で保育室の環境構成の変更を考えてみたいということが担任保育者から話された。

観察4（12月4日）

この日、筆者らが保育室に行くと、入り口付近の出席ノートを貼る場所の環境構成が変化していた。以前は、入り口付近に子どもが3人ほど立つといっぱいになるくらいの大きさの机が置かれ、その上で登園時のシール貼りが行われていた（図1）。新しい環境構成では、新たに机が2つ加わり、1つは出席ノートを置く台として、残りの2つがシール貼りの場所として使われていた（図2・写真2）。その日はD児が既に登園しており、朝の片付けの場面は見ることができなかったが、担任保育者Cからは、広がったことで登園時のルーチンワークが以前よりスムーズにできるようになってきたことが筆者らに話された。また、新たに増設された机は、登園時間に出席ノートを貼る場所として使用された後は、子どもたちの製作台として使用されていることが観察された。机は座位で使用可能なもののため、幼児らが座ってクリスマスの飾りを作製しており、新しい環境構成が幼児の生活の中に溶け込んでいる様子が見受けられた。

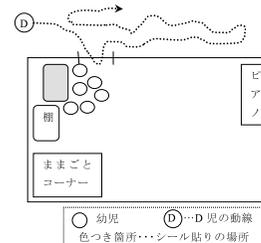


図1 以前の保育室の環境構成とD児の動線

観察 5 (12月18日)

・登園時

D児の登園時、保育室には出席シールを貼ろうとしている幼児らが既に7名ほどいたが、2つの机に分散していることで、以前のように入り口付近が混雑していなかった。そのためかD児はスムーズに保育室に入り、一人で出席シールを貼っていた。母親もそのようなD児の姿をみて安心したように、すぐに帰宅していた。その後D児は、カバンや帽子を自分だけではすぐに片付けようとはしないが、保育者B、Cからの言葉がけで比較的スムーズに行動に移せていた。

・自由あそび

クラスのほとんどの子どもはお店屋さんの品物づくりやお店屋さんごっこをして遊んでいた。D児は、自分から紙とペンを持ってきて、真剣な表情で紙に100と描いてお金を作り、お店屋さんへ買い物に行った。目的を持って遊びに取り組んでいる様子が伺えた。

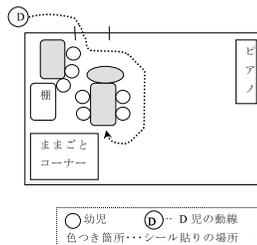


図2 変更後の保育室の環境構成とD児の動線



写真2 環境構成変更後の保育室の様子

第3回目カンファレンス (1月13日)

担任保育者からは、前回のカンファレンス以降すぐに環境構成を変更させたことが報告された。その結果、シールを貼る場所が確保されることで、D児の朝のルーチンワークが以前に比べて行いやすくなったこと、またそれは、D児以外の子どもたち、特におとなしいタイプの幼児にとっても、よい効果があったことが述べら

れた。また、保育者の新たな工夫として、朝のルーチンワークを分かりやすく描いた絵をロッカーの上や荷物掛けなどそれぞれの場所に置いてみたとのことであった。その新たな工夫はD児だけでなくクラス全体に対して分かりやすい援助になっていると感じていることが語られた。

朝の登園時以外のD児の姿としては、以前よりも自身の遊びたいことに向かって、取り組む様子が見えはじめていること、その中で一部の子どもたちと少しずつ関係ができてつつあることが話された。お弁当の準備・片付けや帰りの支度はまだ上手く出来ないこともあるが、これもD児個人への支援ではなく、クラス全体への分かりやすい援助という視点から工夫をしてみたということであった。

IV. 考察

本研究では、保育室の環境構成と幼児の動線に着目し、保育実践について物的環境の側面から検討を行った。他児との関係を築くことが苦手で、日々のルーチンワークが身につけにくいD児に対して、当初、保育者の関わりなどから支援をしようと試みていたが、観察やカンファレンスを行う中で、D児は他児が密集している登園時の保育室の環境が苦手なのかもしれないという環境構成面での問題が可能性として挙げられた。その結果、環境構成を変化させることで、D児の動線は変化し、少しずつ登園時のルーチンワークが行いやすくなってきており、環境構成を見直すことで幼児の姿の変容を支えられることが明らかになった。

保育者は、保育実践での幼児の姿に問題を感じる場合、その多くが自らや保護者の幼児との関わりを持ち方に何らかの原因があると考え、そこからアプローチをしていこうとする場合が多いと思われる。

本研究においてもD児がどのようにすればスムーズに朝の片付けが行えるのかということ、保育者は自分たちの関わりや保護者との対応から探ろうと熱心に関わっていた。保育者による継続した丁寧な関わりは、幼児にとっても保護者にとっても大きな支援となっていたと思われる。だが、保護者や保育者の関わりだけが要因と考えるのではなく、保育室の環境構成に注目し、環境からも要因を探ってみることで、幼児の姿が変容する兆しが見られたことから、環境構成という視点から保育の検討を行うこと

の重要性が示唆された。

また、気になる子に対して配慮を行うことは、気になる子だけに行う支援ではなく、クラス全体への支援である場合が多い。本研究においても、気になる子であったD児にとってよいと考えられ、変更された環境構成は、結果的に他の子どもたちにとっても生活しやすい環境構成となったことが明らかになった。

子どもの生活や遊びに困難がある場合、その背景には様々な要因が複合的に存在する。そのため、その手立てが明確にはなりにくい。保育者はその状態を引き起している要因と思うものに対して一つひとつ対処し、試行しながら保育実践を行っている。このように手探りの中で営まれる保育実践において、保育者の関わりという人的な側面からだけで保育実践を考えるだけではなく、物的な環境面からのアプローチを行うことも可能だと認識することで、保育者自身にも新しい視点が得られることが考えられる。

引用文献

- 本郷 一夫・澤江 幸則・鈴木 智子・小泉 嘉子・飯島 典子 (2003) 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査 発達障害研究, 25 (1), 50-61
- 刑部育子 (1998) 「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的分析 発達心理学研究, 9 (1), 1-11.
- 北浦かほる・増田宏美・萩原美智子 (2001) 食事と睡眠のための空間：夜間保育所の保育環境に関する研究 (その3). 学術講演梗概集. E-1, 建築計画I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎127-128
- 厚生労働省「保育所保育指針」(平成20年告示)
文部科学省「幼稚園教育要領」(平成20年告示)
- 田尻 由美子 (2002) 保育内容環境の指導における環境教育的視点について. 精華女子短期大学紀要. 28. 19-28.
- 渡邊 桜 (2008) 保育行為における保育者の「葛藤」変容過程と保育室の環境構成との関連性—コーナー設定のあり方に着目して—子ども社会研究14. 91-104.
- 吉田耕一郎 (2004) 「気になる子」への保育現場での臨床発達心理学的アプローチ 國學院短期大学紀要21. XCIX-CIX.
- 吉田若葉・宮本慶子 (2008) 自然環境と子ども

の育ちに関する一考察：D幼稚園・5歳児での実践 (1). 北陸学院短期大学紀要 40. 173-196

謝 辞

本研究では、広島大学大学院教育学研究科 真鍋健さんと共に観察・カンファレンスを行いました。記して深謝いたします。